

書を携えよ 町へ出よう

With Your Books Rally in the Streets.

本を読む。都市を歩く。そうして知識を広げ、考えを深める。そしてアウトプットする。自らの考えの深まった分だけ、書の、町の奥深さは増していく。書にも町にも広がる限りない世界が僕らを待ち構えている。



▲書を携えて、総合図書館の前で。

M 1の今年度の1冊

One Book of This School Year for Each First-year Master's Student.

text_HARA /M1

大学院に入り、1年が経つM1学生。この1年でどんな本を読んできたのか。10人の学生が、1人1冊書評を書いた。本の条件は「今年度読んだ、『都市』に結び付けられる本」。本のテーマもてんでバラバラ、どんな

な時に本を読むかもばらばら、各人の豊かな個性が如実に表れている。今の都市デザイン研の学生がどんな本を読んでいるのか。もし、ご興味のあるものがあれば、是非手に取り、読んでいただきたい。

書名
著者
出版社
書影
学生名
どんな時に読む？
書評

『ビジネスの限界は アートで越えろ！』

増村岳史著
株式会社ディスカバー・
トゥエンティワン



『愛するということ』

エーリッヒ・フロム著
鈴木晶訳
紀伊國屋書店



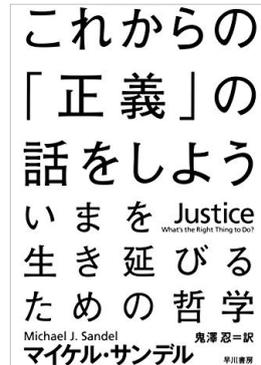
『美しい都市・ 醜い都市』

五十嵐太郎著
中央公論新社



『これからの「正義」 の話をしよう』

マイケル・サンデル著
鬼澤忍訳
早川書房



『都市の論理』

藤田弘夫著
中央公論社



箭川 展

待ち合わせなどに早く
行って待ちながら読書

小田島 啓太

自分の人間的な浅さに
嫌気がさしたとき

松本 大知

主に移動中と寝る前
30分

仙石 宇

受け売りから脱する必
要を感じたとき

山口 智佳

時間があっても眠れない
とき

感性-ロジック、価値創造-課題解決という二軸を用い、アート・デザイン・サイエンス・テクノロジーを分類し、デザインを「感性×課題解決」に著者は位置付ける。「描く」イメージを持ってしまいがちなデザインだが、人が使うという観点なしに語れないことにハッとさせられた。都市と人の関係性を研究すること、都市と人と接し活動すること、そして都市の将来像を描くこと。「都市デザイン」の深みを痛感する。改めて、都市デザイン研究室の一員として、都市により向き合っていく所存。

この本は皆さんの想像する『愛』についての本とは違うかもしれない。なぜなら、『愛する方法』についてではなく、『愛する行為に対する姿勢』について書かれた本だからだ。フロムは『愛する』という行為が自然発生的・受動的な行為でなく、能動的かつ技術的な行為であり、『愛する』には習練が必要であると説く。これはまちに対しても同じことが言えるだろう。自分の人やまちとの向き合い方を今一度問い直し、燻ぶった自分の心を再び前に向けてくれる、何度も読みたくなる一冊である。

守るべき「景観」、美しい「景観」とは何か。それを再考させられる一冊。建築史家である五十嵐が、2003年に国交省が発表した「美しい国づくり政策大綱」をやり玉にあげて、政府が掲げる「美しい景観」を目指す方針に疑問を呈する。果たして政府が目指そうとしている日本の景観は美しいものなのか、そもそも「美」に関する感覚は一概に政府に管理されてよいものなのか、と。これからの日本らしい都市を考える上で、当然のように「景観保全」などと唱えることに慎重になる必要があると感じた。

これは父から誕生日にももらった本で、曰く「その大学に通うなら読んでおくと良い」。社会における「正義」が何によって定められるか、幸福、自由、美德の観点から迫っていく政治哲学書である。日頃都市に対して漠然と「正解」すなわち絶対的な「正義」があるように思い上がってしまうことがある。しかし著者は公共の問題を考える際に表面的な中立性からは真の相互尊重は生まれず、コミュニティにおける共通善に向き合うことこそ必要だと訴える。父はこれを見越していたのか。今日も襟を正す。

「都市は人間が創り出した最も複雑な創造物」-あとがき一行目である。本書は社会学という観点で都市を、都市-農村と権力の関係から捉えている。都市工学系学生の端くれとして、都市というカオスな対象を目の前に対象範囲を狭めることで対応してきた。都市空間の一部に意識が集中しがちになり、まるで都市が絶対的に独立した空間の様に錯覚してしまっていた私を揺り戻すような体験となった。都市がなぜ飢えないのか？といった人間生活の根源的な疑問を再度思い起こす一冊となっている。

『なぜ僕が
新国立競技場を
つくるのか』

隈研吾著
日経 BP 社



Miao Siran

In the library and
my apartment

From 1964 to 2020, Outstanding Japanese architects emerged one after another who effectively promoting the social and economic renewal and the surge of new thought. In this interesting book, Mr. Kuma not only told about the design process of the New National Stadium which was full of twists and turns, but also talked about his own thought on wooden architecture, hoping to lead Japan back to the "wooden era" again.

『プリンセスメゾン』
①～⑥

池辺葵著
小学館



前山 倫子

誰かと話したいとき、
悩んでいるとき

「な んだかうまくいかに
いって思うときは一
人で外を眺めるとキラキラ
するものがいっぱいある。東京
はそんな町だと思うんです
」。マンション購入を目指す
居酒屋正社員「沼ちゃん」と
不動産会社の人々、いろい
ろな女性たちと家との物語。普
通の人たち一人一人が生きる
中で感じる孤独や不安、優し
さや希望が、それに寄り添う
家やまちの風景とともに繊細
に描かれています。都市や建
築は確かに人を幸せにでき
るのである、と思える本です。

『集落探訪』

藤井明著
建築資料研究社



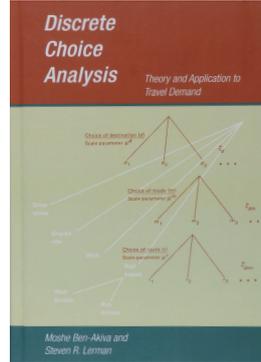
原 洪太

自らの知らない世界に
足を踏み入れたいとき

著 者曰く「集落を巡る旅
は、ホモジニアスな世
界観からヘテロジニアスな世
界観に帰する旅」。本書は、
立地場所、集落形態、住居形
態での差異性の演出を、布置、
配列、表徴の視点で空間構成
技法を44の集落を例に紹介
している。歴史のフィルタを
かけられてもおお取敢せず、
差異性を現出して今も生きる
集落はそれ自身が有効な教科
書だ。集落を創りあげた構想
力は、有効なシステムへの試
行錯誤は、千年を超えて集落
を持続させている。千年の持
続は集落が都市計画に突き付
ける至上命題だ。

“Discrete Choice
Analysis”

Moshe Ben Akiva and
Steve Lerman 著
The MIT Press



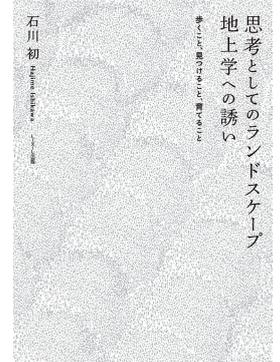
Tatiana Tatis

In Komaba Library
or in my Room

The book constitutes the first systematic organization of discrete choice modeling methods and their applications. It states that rather than having a plan as the final product of the final process, planning should be an on going and integral part of a proper decision-making process, an innovative concept by the time it was introduced. Then it proceeds to describe the bases of the disaggregate models in a clear, practical and useful way.

『思考としての
ランドスケープ
地上学への誘い』

石川初著
LIXIL 出版



藤原 大樹

電車に乗っている時間
など手持無沙汰なとき

ランドスケープという言
葉は様々な意味を持っ
た言葉であるが、この本では
厳密に定義していない。「ラン
ドスケープとは何か」では
なく、「ランドスケープから
見えるものは何か」を議論し
ているのである。本書の一節
ではポケモンGOを例に、都
市における公園や道の役割、
それにかかるルールはどのよ
うなものかを読み解いてい
る。ランドスケープを学ぶと
いうより、まちを歩いている
ときにランドスケープとして
どのようところに注目して
考えると面白いことを知るこ
ができる本となっている。

Information



Hey listen, -ちょっと聞いて！

03.12 施工現場を見てきました！



今年度設計した環境学習ゾーンの工事が進行中
でした。図面が空間になっていく様は期待と不
安が交互に押し寄せる景観でした。竣工後の様
子は来月のWebマガジンで。(M1 藤原)

03.15 伊豆大島・ヨーロッパへ行きました



B4の卒業旅行は伊豆大島とヨーロッパ周遊
でした。波浮港の港町を歩いたり、西洋建築
史を政治史と共に学んだり、学びの多い旅
となりました。(B4 應武)

03.23 復テザ現地発表



復興デザインスタジオの現地発表をしてきま
した。演習が終わった直後に豪雨災害に見舞
われた対象地。「事前」の意義を改めて考え
させられます。(M1 仙石)

03.27 三国まちづくり研究報告会



旧森田銀行にて三国PJの今年度の活動報告
会を行い、意見交換会では様々なご意見を頂
きました。M2の皆さん、また三国祭で会い
ましょう！(M1 前山)

今年度ももう終わり。色々なプロジェクトで今年度の成果が形となって現れました。
来年度の都市デザイン研究室の活動にもご期待ください。

3月のWebマガジン

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/>



03.19-21 内子のミライをつくる



03.24 富山プロジェクト 社会実験



03.29 閉場前の浦安魚市場で

4月の予定

Lab Meeting
5th, 18th, 24th

3rd (Wed.)	研究室ガイダンス
5th (Fri.)	第一回研究室会議&花見会
6th (Sat.)	手賀沼PJ 竣工現場見学
11th (Thu.)	2018年度プロジェクト報告会
19th (Fri.)	上野PJ 勉強会

✳ 編集後記

昔から本をよく読む。お陰で自室の壁には所狭しと
本が並ぶ。大学に入ってから大学の図書館で、アル
バイト先の古本屋で、より本に触れるようになった。
本の並ぶ棚はさながら都市だ。多様な人が様々なこと
を語る場。そして身近でも知らない世界がこれでもか
と広がり、自らの小ささを思わせる場。本棚に広がる
深遠なる世界への旅を続け、そして自らもその世界を
広げる立場になければならない。

まず同期があげた本のほとんどを知らない。なおの
こと自らの世界の狭さを思い知る。まずはここから自
らの世界を広げていこう。(M1 原)